

少しずつ前へ進む意志

—広がる多様なニーズ—



【**少しずつ前へ進む意志**】 今回の訪問は、平日の学校の様子や避難所の生活を知ることが、「ちょっと後ろを」併走するためには必要であるという見解に基づき、先発隊（金曜日午後入）と後発隊（土曜日早朝入）の二隊編成で臨みました。先発隊の到着は、小友小中学校のちょうど5時間目頃でしたが、廊下で生徒さんからの「こんにちは」という爽やかな挨拶をもらい、平常を少し取り戻しつつある学校を感じました。それでも、一方で、連休の谷間の平日の午後というダレている感じがあっても不思議ではない学校の中でのその爽やかさには、「がんばらなきゃ」という「少しずつ前へ進む意志」が感じられもしました。

第4回の訪問（先々週）の段階では、校庭は自衛隊の重機置場になることが決まっています、体育や部活動ができないことを憂えておられましたが、1週間後の今回の訪問では、小友小中学校の校庭は、市内で唯一使える校庭となることになったようで、GWに入ったボランティアの力で、校庭整備が行われたというお話でした。それでも校庭の周りは瓦礫の山ですから、思いっきり、サッカーボールを蹴ったり、野球ボールを打ったり、とはなかなかいかない状況ではありますが、それでも「有る」と「無い」とは大違いで、広田小中学校の運動場としても使われるとのことでした。そうした中で、5月22日は、年間計画通りに「運動会を行おう」ということで調整が進められているようでした。「できそうですか？」という私たちの問いかけに、教務主任の先生が「見切り発車ですが、そうでもしないとね」と答えておられ、そこにも「少しずつ前へ進む意志」を感じました。

前回設置した支援依頼のパネルはうまく機能し、水曜日（GW中）にはFAXが届き、木・金の神奈川での注文・納品を経て、土曜日には支援物資の搬入になりました。その中には、電気スタンドの注文もありました。どう使うのかということについても、小友小の校舎の1階を使うことになっている中学生の教室が、東向きであるために、午後にはすっかり暗くなり、勉強できる明るさではないことが問題となっていると記されていました。しかし、私たちも発注にあたり、その方法が現在取り得る最善の方法かどうか決めかね、今回の訪問で状況を把握をして、よりよい方法を小友中と一緒に検討しようと考えておりました。そのことを訪問の際に管野副校長先生にすると、「実は、今、電気工事が入っていて、もしかしたら、教室の蛍光灯だけは通電できるかもしれないんです。でも、本当に点くかどうかは…」と話しておられました。しかし、翌日の訪問では「うれしいお知らせがあるんです。電気が点いたんです!!!」とのことでした。写真のように教室には本当に電気がつきました。震災後初めての点灯です。「少しでもよく」が「もっとよく」へと進むそこにも「少しずつ前へ進む意志」を感じました。



さらに、大物提供物資であるソファベットの運んだ保健室では、養護の佐藤先生にお

会いしました。保健室もずいぶん保健室らしくなっていました。当日は、少し大きめの余震があったので、支援隊の私たちに「高田市内で地震がきたら、とにかく高台に行かないとだめですよ。今度は防潮堤も破壊されてますから、津波はすぐにきます。すぐに、すぐに、すぐにですよ」と何回も繰り返され、「支援に来てて被災したら、何にもなりませんから」と気遣っていただきました。そこには、もうこのような被災がないことを祈りつつも、一方で津波とつき合っていくことが求められるこの地区では、それへの「もっとよい備え」を責任として果たされている姿があり、そこにも「少しずつ前へ進む意志」を感じました。

【**新しいニーズ**】 支援として物資を運ぶことだけでなく、地域の物流を下支えすることが、地域の復興において大事であるという理解については、前号でもお伝えした通りです。そのような理解を形にすることが、今回の訪問の一つの目的でした。この点に関しては、広田中学校で必要物資のやりとりをするパネルを設置した際に、大森副校長先生より「地域の業者さんの出入りが始まっているが、そこに注文できるものがない」というお話を聞きました。理由は2つ。1つは、学校配分の予算執行が決定されていないので、注文したくてもできない。もう1つは、その部分を見込んで注文しようとしても、注文できる小物は支援物資として提供されている。前者は、行政レベルの問題ですが、後者は、支援のあり方の問題だと判断されました。そこで、学校に出入りしている地元の業者さんにお話できないか探ったところ、「山十」という業者さんと会うことができました。

山十さんは店舗が流されただけでなく、ご兄弟で、文具店と書店を経営されていたそうですが、文具店経営のご夫婦と息子さんが津波に流されてしまい、書店経営のお兄さんが、仮店舗を使って文具と書籍の両店舗を再開したところであることがわかりました。コンテナサイズの小さな店舗には、売り物である文具が置かれておりましたが、店員さんと思われる方は皆不慣れな様子であり、被災の状況を垣間見ることとなりました。しかし、営業はとりあえず再開したものの、一方で、移行措置の教科書が入ってきて、その仕分け、津波で流された教科書の注文、無償の申請手続き、各学校への仕分けに加えて、各学校へ配達する人手も不足している状態でした。この地域での学校教材の取り扱い店は3店舗だそうですが、いずれも津波に流されているために、学校へ物品を届けることそのものがうまく循環しているとは言えず、それでも営業を再開したことを学校に報告しなければならない等、山十さんだけでなく他の業者さんも問題が山積みであることが伺えました。

この状況を受け、学校に教材を届けることも学校支援の一つの仕事と判断し、山十さんの教科書や教材の仕分けの手伝いと小友小中・広田小中への運搬をお手伝いしつつ、他の2つの業者さんの状況も、次の訪問では把握することにしました。切れている糸

がつながれ、物流が動き出すためには、業者が営業再開するだけでは難しいことを初めて知ることとなりました。山十さんの営業担当の金野さんは、涙目で「ありがとうございます」を繰り返しておられ、復旧はまだまだ始まったばかりであることをあらためて認識した次第です。

【教育への支援は後回し?】

①教育委員会訪問 理科室が流されている小友中学校は、理科の授業のために、理科室の準備にもそろそろ本腰を入れていかないといけない状態にあり、それに対するニーズも前回あたりからあがり始めていました。小友中学校の理科の先生にあげてもらった1年間で必要な教材・教具を、こちらで理科担当の教員に見積もってもらおうと、総額300万を超えました。これをすべて新品で届けることは、組織的に無理であるという判断もありましたから、教育委員会の配分されている予算と支援できる金額、そして、廃棄できる中古品の提供などで、どのように体制をつくっていくかが課題となっています。というわけで、教育委員会の予算配分状況を知る必要があり、教育委員会を訪問しました。

第1号の通信でもお伝えしたように、陸前高田市の教育委員会は、教育長、教育次長、学校教育課長が津波で流されて亡くなり、そのために、職務代理をたてて業務にあたっている状況です。教育に関する意見を、首長部局に対して表明する存在である「教育長」の不在は、一方で、首長部局への要望の力を欠き、他方で、学校のニーズの拾い上げがなかなか進まないという関係を生み出しているように見えました。13日には、副校長と事務担当者を集めての会議が予定されておりましたが、そこで「学校予算として〇〇円だ」とはっきり言える状況にはないとのことで、それでも、教育委員会担当者としては、「見切り発車で少しずつ動かすかしかない」という判断をしているようでした。

にもかかわらず、現在、建設中の新しい仮庁舎（写真）に、教育委員会は移れず、今の仮庁舎に残るそうで、市の行政の復興の動きの一部として学校教育が見込まれているとは言い難く、学校の再開は強く望まれるものの、教育への支援は後回しになる傾向があることを心配せざるをえない状況にありました。



②宮城県石巻市立万石浦中学校避難所の訪問 今回の支援隊の運転手となってくださった黒木啓之さんは、神奈川県大和市で介護の仕事をされておられ、今回の震災でも、高齢者の入浴希望があればボランティアで入浴サービスを提供しておられる方でした。ただし、ニーズがあるからすぐにサービスを提供できるわけではなく、事前の聞き取りが必要で、それによりこちらから持ち込む機材を変更するのだそうです。そのようなことから、私たちも陸前高田支援の帰りに、石巻市万石浦中学校避難所を訪問することになりました。

その避難所には神奈川県の職員が派遣されて、避難所の運営支援が行われておりましたが、派遣職員の岸岡さんは、私たちが教育支援をしていることを知ると、たまっていたものが吹き出るように、子どもたちの様子を話されました。かいつまんで並べますと、40人ほどの小中高生が避難していること、子どもたち専用のスペースがないこと、9

時半消灯のために中高生は勉強時間が足りていないこと、この地域は同市の中でも被災した／しないの差が大きく、それが今後子どもたちの学習の差になっていく可能性が高いことなどです。そして、「これだけ、教育、教育って言われているのに、何もケアがされていない、なんで何だろうと不思議でならない。これからのこの地区を担っていくのは、この子どもたちなのに…」と窮状を訴えられました。加えて、神奈川県職も派遣は1週間で、岸岡さんも10日（つまり、今日）は神奈川へ戻るとのことでした。岸岡さん、その次の担当者、そして、その次とつなぎつつ、それに私たちが加わったところで、「どうできるのかを探る」「そんなことができるのか」「それでも子どもがそこにいればほってはおけない」…、支援隊はそんな状況に置かれて戻って来ました。

万石浦中学校の避難所は、私たちが毎週通っているモビリア避難所と比べると、整然とした雰囲気でしたが、運営の仕方、ルールも異なっているようで、ニーズも異なることを知ることになりました。しかし、「教育は後回し」という状況は、どこにでも変わらずにあるのではないかと思ったりもしました。

【今後の予定】 ■第7回支援活動 5月14日～15日（13日夜発）

○小友小中学校：体育用品（一部）・要望物品、○広田中学校：FAX機

○山十さんの教材仕分けの手伝い ○宮城県万石浦中学校のニーズ確認

■支援準備中の物資 支援依頼のあった理科室用品・体育用品の調達

■支援隊の編成 同行を希望される方は、お知らせください。

【ご協力に感謝!!】

■今回の支援隊のメンバー（9人） 家上幸子（Ed.ベンチャー事務局）

清水睦美（東京理科大学）、池田喬（南林間中学校）、内藤順子（大野原小学校）、

黒木啓之、金子尚弘、すたんどばいみー：西岡歩、高雅弘、長畑シゲミ

■支援物資

小友小中学校：①寄付からの買い出しによる支援：ソファベッド・要望物品（紙・インク体温計）、②支援物資の提供：バレーボール

広田中学校：ニーズ調整のためのパネルの設置

■ご協力いただいたみなさま（敬称略、順不同、物資・寄付を含む）4/30～5/6

大八木直子（笹野台小）、シェイ仁美（相模台小）、小林弘幸（会社員）、

松永雅文（大和市教育支援教室）、小林西子（東京理科大学）、有本真紀（立教大学）、

北澤毅（立教大学）、家上幹雄（会社員）、工藤美和子（大和中学校）、

松葉達憲（神田中学校）、丸源自動車

今後の継続的な支援の活動のために広く寄付を募っております。

横浜銀行 中央林間支店 普通6018180

Ed.ベンチャー東日本大震災支援（エドベンチャーヒガシニホンダイシンサイシエン）

NPO法人教育支援グループ Ed.ベンチャー

〒242-0007 大和中央林間 3-16-12-107

Tel/Fax:046-272-8980 e-mail: toiwase@edventure.jp

